



会報「センドードつうしん」第6号をお届けします。

新型コロナウイルスの収束の兆しが見えず、ロシアによるウクライナ侵攻も長期にわたっています。また、安倍元首相が銃撃される事件を契機に統一教会と自民党との関係が露呈すると共に、政権肝煎りのオリンピックに関連しての贈収賄が明るみに出つつあります。政権にまつわる腐敗は、これらばかりではないでしょう。そして、経済では円安が進行しスタグフレーションの様相を呈してきました。この間の異常な金融政策のツケが回ってきました。

言うまでもなく、これらは長期的な経済・社会状況を反映したものであり、そうした問題を根底から分析することが求められるでしょう。



この頃、新聞やテレビで見かけるのは宇宙に関する記事やニュースです。

月の資源探査などを目指す宇宙新興企業アイスペース（東京）は月着陸船を早ければ今年11月に米宇宙企業スペースXのロケットで打ち上げると発表しました。

「お月様の、うさぎの餅つき」は夢のはかなさと、現実をつきつけられました。

小惑星リュウグウの地表面はでこぼこで着地が難しく「なんて意地悪な天体なのか」と途方にくれたそうです。「初代はやぶさ」の様々な失敗を糧にしてチームで知恵を出し合い安全な着地方法を慎重に検討した結果として、小惑星リュウグウから石や砂を持ち帰った探査機「はやぶさ2」は二度の着地に成功しました。チームワークの重要性を改めて感じます。

そして、「失敗は成功のもと」と、学生の頃先生からよく言われた言葉ですが「失敗を恐れずやりたい事に挑戦してみなさい」と。年を重ねて後期高齢者になってきますと自分は高みの見物で人にばかり期待をかけます。

夏の高校野球甲子園大会、仙台育英学園高等学校の試合はテレビに向かい必死に応援しました。優勝です。日本一に輝きました。「東北の扉を100年ぶりに開けた」と新聞でテレビでラジオで。このおめでたいニュースをビデオに収めて何遍も何遍も見ました。満塁ホ

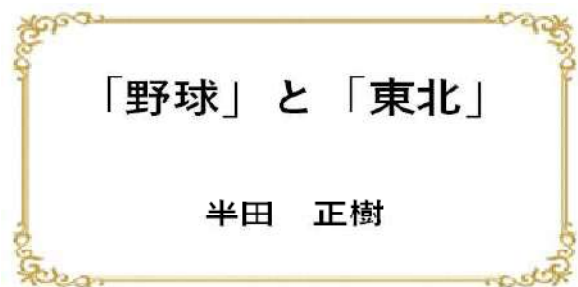
ームランを、球児達の泣き笑いを、勝っては涙負けては涙、何と清しい光景でしょう。自分の心も知らず識らずに清清しくなってゆくようでした。

残念な事は東京五輪・パラリンピックの大人の汚れたニュースです。スポーツの祭典に大きな影を落としました。残念です。

ロシアの大統領のプーチンさんの愛読書の中に、ロシアの作家トルストイの長編小説「戦争と平和」があるそうです。プーチンさんはこの小説をどのように読解しているのでしょうか。

早くはやくウクライナの侵攻を終わらせて下さい。地球に平和を戻してください。祈るばかりです。

宮沢賢治も、この頃の宇宙のニュースや映像を見たらどんな思いを詩や童話で表現されたかと、いつも賢治さんに思いを馳せます。



この夏（2022年）の8月23日、河北新報の朝刊のただ事ではない紙面づくりに一驚を喫した。両全面とでもいうのだろうか、一面と最終面が一体化した紙面に「大旗 初の『白河の関越え』」の見出しが大きく躍っていた。

いうまでもなく、前日行われた「全国高等学校野球選手権大会」の決勝戦で仙台育英学園高等学校が優勝したことを報じたものであった。しかし、この8月23日が「白虎隊の日」であることはどの面にも取り上げられていなかった。

周知の通り「白河の関」は、かつての奥州の入口（関所）であったものの、「東北」の入口（関所）ではなかった。「東北」という地域概念ないし空間は歴史的に新しく、維新

政府が「東夷北狄」という、漢民族が周辺の蛮族を蔑んで呼んだことになぞらえて、支配対象地域としての奥州と羽州を合わせた空間を、「東北」と呼ぶことにしたことに由来するからである。

明治以後、「東北」は、日本資本主義ないし日本帝国主義の食料基地・労働力供給基地として位置づけられてきたし、1970年代以降は首都圏への電力供給を担う原発基地にもなってきた。

現在の全国高等学校野球大会の第1回目は1915年といわれるが、現在までの107年の時間の流れは、ほぼ近代日本の歴史と重なるし、上記の「東北」の歴史ともシンクロする。

わたしのこどもの頃は、スポーツといえば野球であった。文字通りの草野球で、人数に合わせて三角ベースになったり、テニスボールのような球と竹バットが使われたり、ハレの日にはグローブを使った「本格」野球だったりした。まねごととはいえ、実際に身体を使って「野球」の世界に浸るという意味で、どんなこどもでもその日常のなかに「野球」が確実に組み込まれていた。したがって、ラジオやテレビの、学生野球やプロ野球の実況中継を、それこそ選手と一体となりながら聴取・視聴していた。

しかし、わたしの息子たちのこども時代には、すでにそうした状況はなくなり、孫たちにいたっては、むしろサッカーには熱心に向かうものの、「野球」は関心外のスポーツになってしまった。複数で遊ぶ空き地が消えてしまったといったことも否定できないが、むしろそのような次元の問題ではない。

野球は、ごくふつうのこどもが体験できるスポーツではなくなり、上手か下手かを問わずにだれもが関わり、身体に刻み込むことのできる日常の遊びではなくなったという問題なのである。その結果、野球人口が大きく減少した。

現在は、「野球」は小さいころからシステ

マテックに指導され、管理されるスポーツの1つになった。いわばヒエラルヒーの中でさまざまな条件に恵まれた子どもたちが才能教育的に育てられるものになったといえよいだろうか。

そうだとすれば、全国どこであっても「才能教育的」に鍛えることができれば（仮に雪国であっても室内練習場など鍛える場があれば）、何の問題もなくなる。もともと、ここまで個人主義が徹底した社会になったことを考えれば、個人技が最重要要素となるサッカーが子どもたちを引き付けるだろうことは容易に想像がつく。野球はチームプレーであり、その意味でも現代的＝現代的とはいいがたい性格をもつがゆえにすたれたというわけである。

したがって、仮にサッカーという現代の子どもたちが積極的に興味をもち、狭い空間で一人でも真似事（身体に刻むこと）のできる球技で、いいかえれば過去型ではなく現在型のスポーツで全国優勝というのであれば、白虎隊で自刃した少年たちに100年いや150年伏在してきた屈託も晴れていただろうに、と8月23日の河北新報の朝刊を見て思った次第であった。

いや、仙台藩（仙台育英学園高等学校）が長州藩（下関国際高等学校）を負かしたことで、維新政府（＝薩長土肥）の近代的支配力に対する旧奥羽越列藩同盟側の溜飲が下がったはずというのが、やはり「正解」だろうか？



クラシック音楽の協奏曲＝コンチェルトは、ラテン語の"CONCERTARE"に由来する。「争う」「競う」と訳される。同じスペルの

イタリア語は「音を合わせる」あるいは「一致させる」。いずれもインターネットの翻訳サイトにある。コンチェルトは独奏楽器とオーケストラ群が協調しつつ優位を競い合うものだ、と、以前音楽の先生に教わった。イタリアバロック音楽の巨人、アントニオ・ヴィヴァルディは「四季」はじめ600もの協奏曲を残した。

こんなことを思い出したのは、ニューヨークの国連本部で開かれた核拡散防止条約（NPT）再検討会議が決裂して、最終文書を出せなかった、との新聞記事を読んでいた時である。（ウクライナの安全を保障する）ブダペスト覚書の順守とザポロジエ原発の管理をウクライナに戻すことを促すという案文に、ロシアが異を唱えた。途中で消えた文言は他にもあると報じられている。

ウクライナ情勢が影を落としたといわれるが、最終文書がまとまらなかったのは、7年前に続き2回連続である。

ネヴィル・シュートの近未来SF小説「渚にて」（1957年刊行）では、第三次世界大戦はアルバニア軍のイタリア爆撃に始まり、続いてエジプト軍がソ連から供与された爆撃機でワシントンとロンドンを爆撃。更に、アルバニアを支援する中国がソ連と激突。北半球各国の政治や軍の中枢が壊滅し、前線の軍が指令もないままありつた核爆弾を撃ちまくった。北半球すべてが放射性降下物で汚染され、人類はじめ多くの生物が死に絶えた。汚染は南半球に広がった。

オーストラリア軍に編入された米国原子力潜水艦スコピオンとタワーズ艦長に、インポッシブルなミッションが下りた。米シアトル近くから継続して出ている意味不明の電波の発信元を確認せよ、生存者がいるかもしれない、併せて航海中放射性降下物による海水汚染および大気浮遊調査も行え、という。往復距離3万キロを27日かけて航海して、シアトルは無人を確認した。しかし帰り着くと

世界は、創元SF文庫版の副題のごとく「人類最後の日」を迎えつつあった。

この8月、4週間にわたって会議したNPTの舞台裏は知らないが、「競う」「争う」が前面に出て「合わせる」「一致される」思いが後に下がったのであろうか。結局はコンチェルトならず。指揮者にケネディかこの前亡くなったゴルバチョフのような人になってもらうほかないのかも知れない。



8月末に4コマ漫画「おり鶴さん」を1冊の単行本にまとめたものを手にして、一気に読みました。この本は、長崎で被爆した反戦漫画家の西山進（94）が日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）の「被団協新聞」に41年にわたって500回連載したもののうち335作品を、仙台市の木村緋紗子さんなど被爆者3人らが編集・出版委員会を設けて単行本にしたものだそうです。

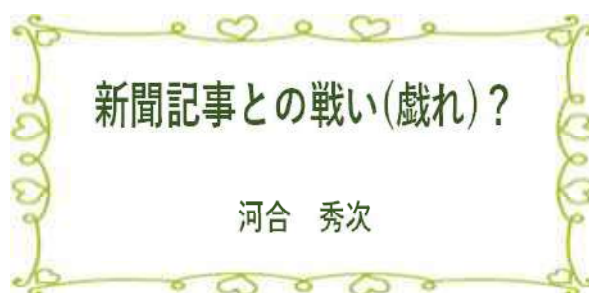
この本では、月1回の「おり鶴さん」を概ね10年でまとめて、「1979年～1989年 おり鶴さんスタート～世界的な核兵器廃絶運動の中で」、「1990年～1999年 被爆者援護法制定に向けて、運動高まる」、「2000年～2009年 核兵器廃絶へ～世界に広がるまなざし」、「2010年～核なき世界、そして平和な未来へ」と区分けして、読みやすくしています。本当に長い間、被爆者・戦争体験世代として、核兵器の廃絶と核被害者の救済、そして伝える・語り継ぐ活動が積み重ねられてきたことに敬服しました。改めて、本当に多くの人達の被爆体験の伝達と語り継ぎのうえに2017年7月の核兵器禁止条約の国連での採択、2021年1月の同条約の発効等となっている

ことを感じます。

西山さん自身の視点が鋭いことにも感心します。例えば、東日本大震災に関して、「被爆者が原発の危険性をどれだけ訴えてきただろうか」と自問しつつ、放射能の怖さや「原発いらない」を訴える漫画が2011.5～2011.11に継続して掲載されています。

そして、あくまで暮らしの中での四季折々を感じながらの漫画であることにも感心させられます。

アベ元総理の国葬や旧統一教会と自民党等との繋がりなどが問題になっています。まずは個人としてしっかりと地に足をつけて考えることが大事だと思います。日本国憲法が第11～13条にかけていう、「この憲法が国民に保障する基本的人権は、侵すことのできない永久の権利として、現在および将来の国民に与えられる。」、「この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によって、これを保持しなければならない。」、「すべて国民は、個人として尊重される。」を踏まえたいものです。「おり鶴さん」に学びながら、暮らしの中で、視点・観点を見失わずに、持続・継続して発言や行動をしていこうと思います。



皆さんお仕事柄、新聞（記事）を活用しておられる方も多いのではと拝察します。私自身もこの何十年か、新聞を愛読する方でしょう。（私の場合は日経新聞が中心）

実際、仕事上のヒントを貰ったり、考えるキッカケを教えて貰ったり、セミナーや講演会の直前にポイント整理をしたり、活用法はその場その場に応じて千差万別と言います

か、ケースバイケースです。これは、と思った記事を切り抜くのは良いのですが、いつの間にか書斎のスペースをかなり占領してしまうのが悩みの種。

そこで、種々考え悩み抜いた結果、便宜上次のような大分類を今も継続中です。

- A. 国際政経／世界情勢
- B. 法律・経済全般
- C. (ビジネス直結の) 法律・経済
- D. 財テク関連
- E. 外国語学習 (系)
- F. 健康管理
- G. シニア関連
- H. 技術関連
- I. 社会全般
- J. その他 (未整理)

大抵は A4 の裏紙活用で、用紙に貼っておくと保管にも便利、何かの時にすっと引っ張り出せて重宝。ただそれも溜ると結局、精読も素読もせず、ただの積読 (ツンドク) になってしまう。

それでも、全く読まないよりは遥かに効果的！と自分に言い聞かせています。一度破棄してその後必要になった記事が出てきた場合、その内容やタイトルから、今の時代ネット検索して、必要な記事を再度引き出す事は十分可能ですし、私自身よくやっています。

先日、書斎を整理していたら数年前の記事が見つかった。懐かしい思いすらしたのを覚えている。一般論で言えば、記事の寿命 (賞味期限) は 1 年、と定義付けている。それ以上保管するのは、余程再生・再現が不可能な物だけ。

それと既に頭に入った記事や、今では無用となった記事はドンドン捨てる事も超大切。一方、数字や考え方を示唆してくれる記事は特に重要で、右端に「重要」とか「超重要」とか赤でマーキングして保管しておくとう便利。

必要に応じて切り抜き／保存し、必要な時

に読み返せるのは何といっても楽しい事です。私自身、現在都内の某大学の留学生寮の管理人をしています。20 才前後の寮生 (学生) 23 名は誰一人新聞購読はしていない。管理人の私だけが日経紙を愛読しており、彼らの大学の記事が出た時には掲示版に張り出している。その時は読んでくれている様ですが。

昨今ネットの普及で、特に若い方々は情報はスマホで全て事足りる、と考える向きも多いが、私の場合はこのまま当分 (死ぬまで!) 新聞党 (印刷物派) であろうと確信する今日この頃です。どうしても新聞記事とのご縁は断ち切れない (笑/泣)。

皆さんは如何でしょうか？

蛇足 1: 「新聞は下から読め！」とよく言われますね。確かに一理あると常々思っています。新聞の下 4 分の 1 程度は週刊誌や新刊書籍の紹介や宣伝記事が多い。それらを (読むのでなく) ザッと眺めるだけで、今世の中で何が話題になっているか、或いはこれから何が問題になりそうなのか、国会議員様がどんな問題を起こしそうなのか？おこしているか？が手に取る様に理解できる。私は貴重なツールと位置付けている。ただこれらは雑誌の売り上げ期待ベースなので、実態とはかなり違っている場合も多い。勿論正鵠を得た内容の記事もある様ですので、やはり読者自身が自分で判断して取捨選択すべきなのでしょうね。

蛇足 2: 以前、NIE (Newspaper in Education) と言って、新聞を教育現場 (前線) にこの言葉が盛んに使われていた。このネット時代でそれが廃れた、亡くなったのはとても寂しい。新聞による効果があつたスマホで本当に得られるのでしょうか？といつも疑問に思っているのは、私だけではないのでは？と常々考えてます。

子供の貧困あるいは孟子

金森 明男

"子どもの貧困" (子供の貧困などあるわけがない、子供は扶養されている立場だ。)は、"貧困家庭の子供"の言い換えで、問題をすり替えています。解決には貧困家庭の減少・消滅が必須ですが、根本的な事柄(貧富の格差)には手を付けず、形だけの子どもへの援助、それも、十分ではない状態で、目先を誤魔化します。

OECDによれば、日本の子供の貧困率は、加盟国34か国中10番目に高く、平均を上回っている(2010年)。とすれば、貧困家庭の割合が高いのだから、貧困家庭の問題以前に、国自体が貧困の方へ、転落しているのだから。

以上を考えていた時、『孟子』を思い出しました。

「わが梁の国を強くし、ひろげ、富まそうとして下さるのでありましようか。」(『孟子』梁恵王章句上、『新釈漢文大系』第4巻、明治書院、7頁)

(今の諸侯のしている事を見るに、)「犬や豚が、人間の食べるべき食べ物をむざむざと食べているのに、知らぬ顔をして、それを取締ることもせず、又道ばたに飢えてたおれている者があっても、それを救うために、すぐ王侯の米倉をひらいて、食料を放出することも知らない。それで、人が餓死すると、『自分のせいではない、凶作の年だから仕方ない。』と、年のせいにし、年を罪人扱いにする。これは、ちょうど人を刺し殺しておいて、『それは自分が殺したのではない。この武器が殺したのだ。』と言うようなものと、ちがうだろうか。ちがいはしまい。全く同じであ

る。だから、王様がもし、凶年に苦しむ民を見て、『それは凶作の歳のせいだ』などという、(自分の責任を歳になすりつけて、)歳を罪するような無責任な考え方をしないならば、そしてよく自己を反省して、誠実に仁政を行なうようにすれば、そうすれば、すぐにも、ひとりで天下中の人民はみんな王のもとへ慕い集まって来るでしょう。」と。(同、19頁)

最近、民主主義対専制主義なる言葉を耳にしましたが、民主主義体制を自認している国の、民主主義の構築に失敗した(失敗ではなくて、利用しただけではないか?)のが、米に代表される西欧社会(日本も含まれる)でしょう。よりましな専制主義対専制主義程度にしか比較出来ないでしょう。しかし、比較以前に、対象としたい崇高な理念など念頭に無い様に見えます。

現代の社会は、課題を受け止める事が出来たのか?

結局は、孟子の時代と「ちがいはしまい。全く同じである」。

ビオトープとしての共同体

末永 茂

共同体という言葉はそれ自身、共感を得やすい響きを持っている。しかし、それ故に反作用も大きいのが実態ではないだろうか。愛憎渦巻く小宇宙になりかねない側面も持っているし、歴史事実としても多くの悲劇も確認できる。最小単位の家族共同体ですら、一家皆殺しという惨劇は珍しくない。封鎖空間固有の危険性がそこには存在している。だから核家族化、単身世帯増加、婚姻率の低下による個への分解も進むひとつの要因になっている。

生態系の概念にビオトープというのがある

が、ある程度隔離された空間で生命作用が相互に循環＝完結し、あたかもそこだけで成立するかのような錯覚を覚える。しかし、実際は広大な周辺との相互作用と影響を受けながらこの空間は成立しており、果ては宇宙の彼方とも結びついている。その意味で、このピオトープは閉鎖空間＝独立システムという概念から見れば、一つの幻影なのだろう。

江戸時代は中国や東南アジア、オランダ等の一部ヨーロッパ諸国との制限的な貿易＝管理貿易があったが、政治的には鎖国体制というピオトープ的国家システムを形成していた。従って、漁師や船舶航行者が台風に遭遇し難破して、偶然大陸に流されても帰国出来なかった。外国に踏み入れた者はそれだけで、罪人にされてしまうのであるから、国家システムは封鎖体制そのものである。こうした制度が 250 年も続いたわけだが、結果は誰も承知の歴史展開である。限定的空間や特殊な空間は仮に「独立空間」であったとしても、それ自身のみで成立できない。グロテスクな事例では映画『地獄の黙示録』のようなものを挙げれば、適当かも知れない。あるいは狂信的な新興宗教のような組織・団体がある。社会経済的システムが非資本主義的、かつ市場取引を廃止した場合、奇妙な運営が支配し独善に陥ってしまう。これを統治するためには強権のかつカリスマ的イデオロギーが大きな役割をはたし、大抵は独裁的支配者を生み出すことになる。こうした悲劇や事件は枚挙に暇がない。

資本主義経済は様々な限界があり、修正すべき課題も山積している。だが、時代即応的に矯正や修正が比較的容易にできる体制でもある。第二次大戦によって我が国やドイツはじめ多くの資本主義経済・統制経済・軍事国家は破綻した。そして、戦後再び蘇生したことも事実である。一旦破綻するとそのシステムが永遠に放棄されてしまうのか。はたまた異なった形で再生するのは歴史の選択であ

る。各国は江戸時代のような封鎖経済や原始共産主義社会に回帰することはなかったのである。

特定の歴史観はそれなりに説得的であるかもしれないがあくまでアイディアであり、教条的理解は危険である。同じように政治理論や経済学理論も原理的理解を我々に与えるという点では有効であっても、それをもって現状分析や政策策定に直ちに援用は出来ない。マルクス説でいえば、初期マルクス論やパリ・コミュン論は『資本論』体系をコアに置くことで、学説史的評価は生まれる。だが、他ではない。特別にこれらを分解し、現実の社会分析に対して理論的援用を試みるというのであれば、一人の思想家の全体像評価も高が知れたものにしかならないだろう。後続の拡大解釈は歴史上の大思想家が生涯追及してきた一貫性を見失わせるように思う。



今年 2 月 24 日のロシアによるウクライナ侵攻から、半年以上が過ぎました。

予てより、わが国の食料やエネルギー政策が改善されないままであることを懸念しておりましたが、昨今の世界情勢での安全保障について不安が募ります。当然のことながら世界の食料やエネルギー資源は高騰し、企業や家庭を圧迫し始めています。

食料・エネルギーの安全保障で重要なことは世界中の多くの人々の持続可能な供給にあると考えます。わが国のように資源のない国で、外国に頼ってばかりもいられない世界情勢に加え、近年は円安が加速しており、できる限り国内で賄い得る政策でなければなりま

せん。

1.政府方針(次世代型原発と17基の原発再稼働)

政府は次世代型原発の開発と建設を検討しており、さらに東京電力福島第1原発事故後、全国で再稼働した10基に加え、7基の再稼働を目指す方針としています。福島原発事故から11年を経て、故郷を追われ避難させられ、国の責任が明確でないまま苦悩してきた10万人以上の人々の存在、積み上げられる高レベル放射性廃棄物の処理場も決まらないなど原発の危険性・教訓と向き合わず、この場に及んで何故原発頼みなのか、11年前に戻るだけではないかと考えます。

2.気候変動と自然エネルギーの開発

一方、気候変動による地球規模の災害による被害が年々強まり、近年、世界では「脱炭素で持続可能なエネルギー」という共通認識が広まっています。脱炭素と脱原発を考慮するならば、政府は次世代型原発の開発ではなく、その予算は地域に合った自然エネルギーの開発に振り向けるよう舵を切るべきです。

東京の事業者や関西電力などが東北の自然環境に配慮せず、住民との話し合いも充分でないまま風力発電や太陽光発電を進めようとする事案が問題になっています。自然エネルギーの多くは必ずしも十分なエネルギー源ではないため、その地域で創ったエネルギーは幾つか組み合わせて蓄電し、その地域で使うことで送電ロスを避けることができます。そういう自然エネルギーを増やしていくことを政府にはスピード感を持って進めてほしいと切に願います。

EUではエネルギーの15%削減を呼び掛けましたが、わが国こそ電気やエネルギーは、省エネの徹底が不可欠です。

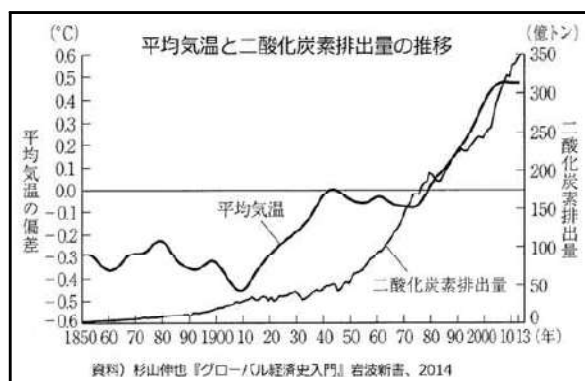
風力、水力、太陽光、地熱、太陽熱などその地域に眠る自然エネルギーとしっかり向き合った開発の結果、エネルギー自給率がどこまで高められるのか、大きな関心事であり希望でもあります。政府には危険な原発とは決別し、

地域の自然を活かして循環する、安全安心なエネルギー政策への見直しを期待します。



環境問題や資源問題が耳目を集めるようになったのは、戦後の世界的な高度経済成長が終焉をむかえた頃で、D.H.メドウズ『成長の限界』やE.F.シューマッハー『スモール・イズ・ビューティフル』が注目された。

昨今では、それが「地球の温暖化」の問題に絞られているように見える。人的活動の排出するCO₂は温室効果ガスであり、それが地球全体の温度上昇を招いているという論理だ。確かに、下図を見ると、1980年代以降はCO₂排出量と気温の変化には相関が高いように見える。



しかし、この図を前提にしても、1980年代以前はこの相関を主張することは出来ず、別の研究では、地球規模の年代における気温の変動については太陽活動の変化など諸説がある。また、C.D.キーリングの示す資料によれば、気温が先に変化することによってCO₂濃度に変動が見られる。要するに、気温上昇には人為的なCO₂排出が主因であるという説は、必ずしも説得的ではない。1980年代から環境問題の研究で知られる「エントロピ

一学会」においてもそのような研究が多いようだ。むろん、これは大問題なので、軽率に結論を出すべきではないが、例えば、矢吹哲夫「地球温暖化を巡る議論に関する物理学的な立場からの考察」(『えんとろぴい』60号、2007年)などは参考になる。

では、どのような対応が求められるであろうか。そこで考えられるのが、「予防原則」

という論理である。科学的真理に到達できず、ある説を支持できるかどうか保留するとしても、そのまま手をこまねいていて良いとは限らないという考え方だ。科学的真理やことの因果関係の研究に注目しつつ、予防原則の観点に立ち脱炭素化活動を支持することは、有意義なことと思われる。

訂正

前号(第5号)、「民間人の被害を出さない方法」金森明男、に以下のような誤りがありましたので、著者および読者にお詫びし、訂正します。

【誤】

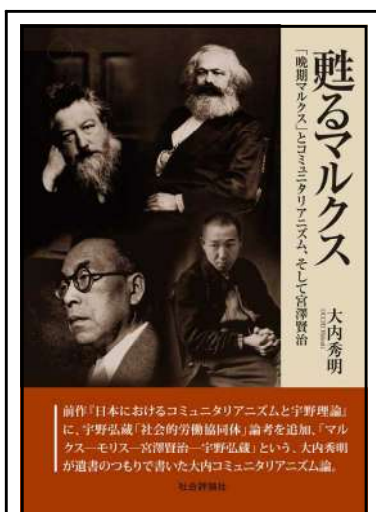
「オバマ氏は民間人の犠牲者の数え方を変えた。これで彼の自由裁量の幅が広がった。オバマ政権幹部によると、これからは攻撃地帯にいる人たちで、戦闘年齢の男は、すべて戦闘員として数えられる。ただし諜報機関が死後に無罪と認めた場合は別だ」(「ニューヨーク・タイムス」29 MAY 2012。N.チョムスキー『誰が世界を支配しているのか?』(157頁、双葉社録)

したがって、推定無罪の"聖なる原則"を維持したまま、殺したあとで無罪かどうかを決めるわけだ。

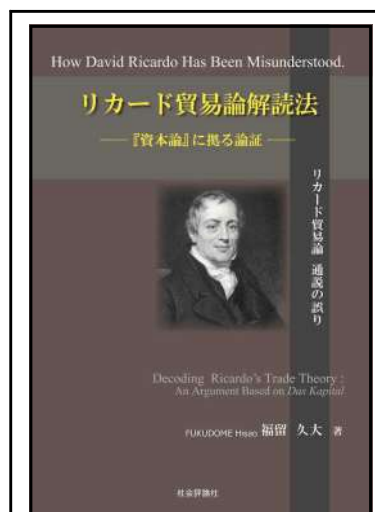
【正】

「オバマ氏は民間人の犠牲者の数え方を変えた。これで彼の自由裁量の幅が広がった。オバマ政権幹部によると、これからは攻撃地帯にいる人たちで、戦闘年齢の男は、すべて戦闘員として数えられる。ただし諜報機関が死後に無罪と認めた場合は別だ」(「ニューヨーク・タイムス」29 MAY 2012)。
したがって、推定無罪の"聖なる原則"を維持したまま、殺したあとで無罪かどうかを決めるわけだ。」
(N.チョムスキー『誰が世界を支配しているのか?』157頁、双葉社、収録)

新著紹介



大内秀明著、社会評論社
2022.9



福留久大著、社会評論社
2022.7



瀬戸大作(原作)、平山昇・土田修(編)、社会評論社、2021.6

編集後記

本誌は、第6号を数えることになりました。振り返れば、第1号が全4頁版で創刊されたのが20年6月、以降、第2号が全4頁版で20年11月、第3号が全12頁版で21年3月、第4号が全10頁版で21年9月、そして第5号が全16頁版で22年4月にそれぞれ発行されました。それなりに定着してきたのではないかと思います。本誌は、ページ数が決まっているわけでもなく、内容の自由度も高いものですので、素晴らしいアイデアがありましたら、お知らせいただければ幸いです。

＋　　　　　＋　　　　　＋

さて、本会員である、福留久大さんが本年7月1日に逝去されたことを伝えなければなりません。享年81歳。

年譜風にのべると、福留さんは1941年に上海にて誕生。60年に鹿児島県立川内高等学校を、64年に東京大学経済学部を卒業の後、69年に同大学院を修了。そして、同年に東北大学助手に、70年に九州大学講師・助教授、85年に教授に就任。2005年に定年退職、九州大学名誉教授に就任されました。

主な著書として『現代日本経済論』（共著、東京大学出版会、1971年）、I.バーリン『人間マルクス—その思想の光と影』（翻訳、サイエンス社、84年）、『九州における近代産業の発展』（共著、九州大学出版会、88年）、『資本と労働の経済理論』（九州大学出版会、95年）、『ポリチカルエコノミー』（九州大学出版会、2004年）、『リカード貿易論解説法

—『資本論』に拠る論証—』（社会評論社、22年）などのほか、多数の論文も執筆されています。

福留さんは、最近までも実に精力的に執筆を続け、「人新世時代の社会主義—大内秀明及び斉藤幸平」（『進歩と改革』、21年4月号から9月号まで全6回に亘る連載）を完結されました。また最後の著作となった『リカード貿易論解説法』は奥付によると刊行日が7月7日になっていますが、本書をお手に取ることが出来たとのことです。

『リカード貿易論解説法』を若干紹介します。高校の教科書にも載っているリカードの比較生産費説は、各国が比較優位に立つ商品に特化して生産し輸出することで各国の経済的利益が高まるとする予定調和的な解釈がなされてきました。これに対して福留さんは、原典の緻密な解説により、リカード理論はそのような「牧歌的な物々交換ではなく、苛烈な（国際）価格競争として展開」（本書、47頁）されていることを導き出しました。そして、これをふまえ内外の蒼々たる経済学者たちの誤りを指摘すると共に、自説を展開されました。これは、経済学説史的にも経済理論としても画期的な成果であり、「福留比較生産費説」と呼ぶに相応しいものです。福留比較生産費説が今後大きな波紋を広げることは間違いありませんが、そうした場に福留さんが居られないことは残念でなりません。ご冥福をお祈り申し上げます。（田）

セングードつうしん 第6号 2022年9月

仙台・羅須地人協会

〒980-0811 仙台市青葉区一番町2-5-12
一番町中央ビル8階「シニアネット仙台」内

HP <https://rasuchijin.jp/>

Tel 022-266-5650 FAX 022-266-5662

Mail rasuchijin-office@rasuchijin.jp



